

スケート発展の舞台となった

中島公園のスケートリンク

スケートの普及期の明治の中ごろから菖蒲池の中に造られるようになった、市民のためのリンクについて紹介します。

スケートは明治十年（一八七七年）に札幌農学校の教師としてアメリカから赴任したブルックスによって札幌に伝えられました。これは、スキーが札幌に持ち込まれたのが三十九年（一九〇六年）ですから、約三十年も前のことになります。しかし、実際にスケートが普及したのは、二十四年（一八九一年）に札幌農学校二期生の新渡戸稲造（にとべい）が、アメリカから三足のスケートを持ち帰ってからです。

初めは道庁の池などで滑っていたのですが、スケーターが増えて狭くなってきたため、二十九年（一八九六年）から中島公園の池にもリンクが造



昭和元年、池のリンクで行われた氷上カーニバルの絵はがき（札幌市教育委員会文化資料室所蔵）

られるようになりました。初めは、ホッケーリンク程度と小さかったものが、年々大きくなり、レース用の四百メートルリンクが造られるようになったそうです。

大正十年（一九二一年）に札幌スケート協会が設立され、池のリンクで、第一回スケート競技会が開かれ、十四年（一九二五年）には、スポーツを通して一般市民との交流を図るため二月十一日に氷上カーニバルを池のリンクで始めました。

カーニバルでは、花火が打ち上げられ、仮装した人たちが思い思いに滑りを楽しみました。昭和三年には、たくさんの観客がリンクに上がったため、氷が沈みリンクが水浸しになるといふ騒ぎもあつたようです。

十三年には中島公園の広場にも特設リンクが造られ、幻となった十五年の第五回札幌オリンピック大会の準備大会の意味を持った全日本氷上競技選手権スピード競技大会が開かれました。

池のリンクは、市民の憩いの場として親しまれていましたが、三十三年ころ廃止となり、中島球場の中に造られていた地上のリンクも、五十五年の同球場の廃止とともに姿を消しました。

（平成八年三月号・第二十九回）